

# 陳舜臣さんを語る会通信

No.149 Jan. 2026

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」 編集委員

発行日 2026年1月1日

## 陳舜臣さん自作の漢詩集『澄懷集』と詩話『麒麟の志』

本号では、No. 148に続いて陳舜臣さんの自作漢詩集『澄懷集』（愛蔵版 1986 成瀬書房）と詩話『麒麟の志』（1993 朝日新聞社）を取り上げました。

### 『澄懷集』「あとがき」

陳舜臣さんの本で自筆の原稿がついているものは少ない。そういう意味で、『澄懷集』の「あとがき」を全文転載しました。

#### あとがき

漢詩は平仄や韻など約束ごとが多いが、いつはそへがかえって情感の通い路を踏みかためる効果があり、自分の思いが、ふしぎなほどすなおに表現されてしまう。これは作ってみて、自分でも驚いたことだった。私がどう漢詩を作るのは、そんな自己確認の作業の一つとしてである。誰のためでもない。

明治以前、漢詩に親しむのは、日本の知識

人の必須の教養であり、それだけに愛好者も多かった。だが、近代化に従って、その伝統は薄くなり、新南の漢詩欄も、大正期には明治期にはなくとも維持した。かたさ消してしまった。愛好者がほとんどいなくなつたのである。したがって、私は漢詩を作っても、公けにすることを考えたことはなかった。一九八四年、還暦を迎えるにあたって、私はフレゼント用に、私家版の漢詩集をつくり、『風騷集』と題した。本書とあない自作自註

で、古くから例はあるが、自釈知はいるのは、いざよが行き過ぎた。という。しかし、これはやむをえないとおもう。『風騷集』は、のちに平凡社の徳穂によって公刊版を出したが、もちろん部数は限られていた。そのとき、あとがきにも述べたが、作家の心象風景は公開すべきものとおもう。このたび成瀬書房の成瀬隼人氏から、その後の作品を編むことをすすめるられ、おなじ考えて、あうけすることにした。

『風騷集』以後の二年――甲子（一九八四）と乙丑（一九八五）の作である。応酬の詩が二首、乞われたのが一首あり、あとは誰に頼まれたものもなく、折にふれて、仕事の合間に作ったもので、ほとんどすべてが「偶成」といつてよいだろう。

一九八六年八月二日

六甲山房にて

陳舜臣



『天空の詩人 李白』（講談社）表紙

■『澄懷集』は百十三部しか発行されておらず、まず、私の目に触れることはないと思っていたのですが、幸いなことに、『天空の詩人 李白』に甲子篇、乙丑篇併せて収録されています。

## 『澄懷集』 目次 及び 巻頭の一首「澄懷」

## 澄懷集 甲子篇

澄懷  
杖鄉年  
畚族福湖村  
泉州開元寺  
喜張和平君還鄉  
南無觀世音菩薩一  
南無觀世音菩薩二  
兵馬俑歌  
魚文頌  
履影  
北野町  
敦煌文物  
米列舊居  
威尼斯 ※ベネチア  
大英博物館  
老虎  
再游敦煌  
飛天  
算命曲  
冬至

※は加筆

## 澄懷集 乙丑篇

迎春  
畫花郎  
賀婚  
和范曾先生韻  
別館牡丹園  
翡翠  
甲子同年  
級友  
哈費茲廟  
※ハーフィズ(詩人)廟  
游普陀山  
和王安石游洛迦山韻  
廈門  
和從維熙先生韻  
歡喜歌  
逆旅  
托鉢  
刺舌  
惠理  
示左其

※は加筆

## 『澄懷集』巻頭の一首「澄懷」

## 澄懷

澄懷默稿數離憂  
耳順那甘章句囚  
天外孤蓬常舉踵  
欄中老驥尚昂頭  
胸間薄膜存餘悸  
腦底殘筋耐激流  
潑墨江湖呵凍筆  
展箋編錄百春秋

## 澄懷

懷おもいを澄きよめて黙稿もくこうすれば數憂しばしは憂に離かる  
耳順じじゆん那な甘章句かんしやうきうの囚あまに甘んぜん  
天外てんがいの孤蓬こほう常に踵かかとを挙げ  
欄中らんちゆうの老驥らうき尚やう昂頭かうとうを昂ぐ  
胸間きゆうかんの薄膜はくまくは余悸よきを存し  
腦底のうていの殘筋ざんきんは激流げきりゅうに耐う  
墨すみを江湖かうこに潑そそぎ凍筆とうひつを呵かし  
箋せんを展ひらべて編錄へんろくせん百の春秋しんじゅう

## ◎澄懷

六朝の画人宗炳(三七五―四四三)は年老いて名山に遊ぶことができなくなつたとき、「唯当澄懷觀道臥以遊之」(唯だ当に懷を澄まして道を觀、臥して以て之に遊ぶべし)と言つたと伝えられている。

(『宋書』宋炳伝)

画人李可染先生が来日したとき、「澄懷觀道」の四字を揮毫してくださつた。こころをきよめてすべてを觀よ。文章も書画もおなじである。こころをきよめて稿を練ると、しば

しばこれでよいのか、という氣もちになる。六十になつたが、文章の字句の囚人にだけはないたくない。遠くまで飛ばされた一本の根なし草になつても、地にかかるとがふれるかぎり、高く伸びあがつて、希望を失うまい、柵のなかの老いたる名馬も、曹操の詩に「老驥は櫪に伏すも志は千里に在り」というように、昂然としているものだ。わが胸の薄い膜にまだ残んのときめきがあり、わが脳がまだはげしい流れに耐えうるうちに、さあ、この人の世の舞台に墨をふりかけ、凍った筆に息を吹きかけ、原稿用紙をひろげ、ここ百年のこともをかきとめよう。

■『風騷集』の巻頭の一首「回顧」がそうだったように、この『澄懷集』巻頭の一首、「澄懷」を読めば題名の意味が分かります。

## 『澄懷集』 「泉州開元寺」、「別館牡丹園」補足

『澄懷集』所収の「畚族福湖村」と「喜張和平君還郷」の2首はいずれも、司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閩のみち)』にも記述があり、既に、No. 148で紹介しました。このページでは、甲子篇の「泉州開元寺」と乙丑篇の「別館牡丹園」を取り上げます。なお、「恵理」と「示左其」、二人の孫を詠んだ二首を巻末に置いているのがほほえましい。

## 泉州開元寺

桐城古刹雨霏霏  
双塔模糊春望微  
最是清明三日後  
時聽南曲思依依

## 泉州開元寺

桐城の古刹 雨霏々々  
双塔模糊として春望微かなり  
最も是れ清明三日の後  
時に南曲を聴き思い依依たり

こまかい雨のふりけぶる泉州開元寺を訪れた。宋代建造の東西兩塔も雨にぼんやりとかすみ、春景色もまだかすかである。泉州は刺桐城とも呼ばれ、かつてはマルコ・ポーロが世界最大の貿易港とたたえた。河が浅くなったため、貿易港の地位を厦門に譲ったが、多年つちかった風雅の伝統はいまも残っているようだ。四年前訪れたときは、弘一法師(李叔同。一八八〇—一九四二。上野の美校に学び、帰国後、出家し、泉州に没す)の金石作品(篆刻)展がおこなわれていたし、このたびは南曲を聴いた。三絃あり、二絃あり、月琴、胡弓、銅鑼、そして笛。しずかに、だが毅然として鳴る柏板。たおやかに、だがはげしいものを訴えるかのような、抑えた音の流れ、そのしらべが、つぎの日も耳からはなれない。おもいは、はてしなく、雨のかたに消えかけては、またつながってゆく。清明の三日後のことだった。



開元寺西塔(編集委員撮影)



開元寺東塔(編集委員撮影)

## 別館牡丹園

神戸元町老酒家  
得名豊艶牡丹花  
當壇四季調風味  
操俎無忘負鼎誇

## 別館牡丹園

神戸元町の老酒家  
名を豊艶なる牡丹花に得て  
壇に当たり四季風味を調す  
俎を操り負鼎の誇を忘れる無し

神戸元町のふるい中華料理店は、ゆたかであてやかな牡丹の名をとり、四季、その場で風味を調している。先代の王さんは、料理は人の心を近づけ、美味は王道を致すこととさえできるといふ。俎を操り鼎を負う者の誇りを忘れなかった。

別館牡丹園主人王炳熾(おうへいしやく)氏は素と余と友誼至つて篤し。惜しい哉前年病を以て香港に卒す。菜館は嗣子に由つて之を継ぐ。生意仍お興隆す。



上は、現在、別館牡丹園に掛かっている陳舜臣さんの書。七言絶句のあと、『史記』「殷本紀」の記述があるが、この部分については『澄懷集』にはない。

**伊尹負鼎(俎)の故事** ■ 伊尹(いいん)は殷の湯王に仕えようと欲したが、つてがなかった。そこで、有莘(ゆうしん)氏の娘の嫁入りの時の付き人になって、鼎や俎を背負ってついて行き、うまい料理をつくって湯にとり入り、ついに湯に説いて王道をなしとげた。(『史記』「殷本紀」)

## 朝日文芸文庫表紙